

問答連 第二十八号

哲学カフェ 第三回

七月二十八日(土)二時

会場：雑貨と喫茶「ムーレック」

「広場」を探そう

ゲストスピーカー 梅林秀行 さん

今回の哲学カフェでは、プラタモリなどにも出演されている、京都高低差崖会の梅林さんに、広場や空間と人々の活動のあり方の関係などについてお話をうかがいます。興味深いお話をヒントにして、まちのさまざまなありかた、公共性やひとびとの自由なつながりなどについて、みんなで話し合っていけたらと思います。またお忙しい中、次のメッセージを頂きましたのでご紹介させていただきます。ありがとうございます。

* * * * *

日本には広場がないと言われる。広場を住民自治や社会発展のインフラとして評価する立場からすれば、この日本のあり方は不満に映るかもしれませぬ。一方でここ最近、「広場論」といえるような議論が盛んになってきました。教会や市庁舎の前に広がっている、ヨーロッパによくある誰もがイメージしやすい

広場に加えて、幅広の大型道路やお寺の参道といった、いわば非典型的で非公式といえるような広場も評価しようとする議論です。つまり人々が日常的あるいは非日常的に集まるような空間、それらの場所も含めて広場と呼ぼうという議論なのです。

ひろばがあるからこそ人々が集まり、そこで議論や交流などの関係が生まれ、それが私たちの市民社会を基礎づけている。これをこれまでの議論とするならば、新しい広場論は、方向性がやや異なります。

私たちの生活にはすでに広場が存在している。それは都市計画によって整然と用意されたものではないかもしれないけれど、人々が集まる空間はいつのまにか私たちの生活風景のなかに生まれているのだ。たとえば、道路の上に。たとえば、川の上に。たとえば信仰の場に。これが新しい広場論の中身といえるでしょうか。

どんな空間で、人々の活動は群れ集まっているのか。あるいは人びとの活動によって、どこが広場として立ち現れるのか。つまり私たちの生活を空間から見た場合、まちの「ふくらみ」はどこで見つけられるのか。



まちの「ふくらみ」はどこで見つけられるのか。今回の哲学カフェでは、ぜひ色々な広場を探し出せたらいいなと期待しています。そして広場のあり方に応じた、色々な人びとの集まり方についても。(梅林)

* * * * *

特別企画

梅林さんと一杯やりましょう!

打合せをさせていただいた時に「お礼はできませんが、ゲストの方と一杯やるのが《しきたり》で...」とやわらかくこちらの懐具合をお知らせしましたところ、「いいですね。みなさんで割り勘といきましょう」と快く言っていました。

ということで話し合いのあと、梅林さんをまじえた夕食会も予定しています。参加を希望される方は、あらかじめ、申し込みをお願いします(定員十名)。



時間は5時から7時、会費はおよそ二千円を予定しています。会場は未定です。当日お知らせします。申し込みは、下記のホームページからメールで、もしくは永井(090-8651-3972)まで、お願いします。

「人間は動物の中で特別なの？」 報告

今回も、短いテキストを用いての議論の展開でした。話題は 動物の権利、動物売買の問題、人間と動物の優劣性、人間の特別性としての言語、さらに 西洋と東洋の自然観や動物観についても話が弾みました。

一ノ瀬東大名誉教授の話題「人間は特別だけれど、どんな動物も同じく特別」は、西洋的な人間中心の考え方に疑問を投げかけたものです。彼のテキストによると、「人間のしてきたことを振り返ると(戦争、環境破壊など)、動物の方が道徳的にすぐれているとさえ思いたくなる。そのときそのときをシンプルに生き、いさぎよく死んでいく。「高潔」という言葉で表現したくなる、動物たちの生き方。こういう視点から、動物もそれぞれ特別な、尊重されるべき価値を持っていると考える哲学者たちもいる」という考え方で、参加者の多くが同意されていました。

人間存在研究所の山田武さんによる「人間は言葉を持つ、ことでどう変わったの？」という問いかけでは、《言葉を持つ》ことによるパワーの由来が説明され、同時に、そのパワーが、一ノ瀬さんと同じように「人間の愚かさ」につながっているとの指摘がありました。「言葉のパワーを持った人間することは、愚かなことが多いよね。人間は、神を創って自分の力や正しさを説明したり、自分の主張に従えようとしてたり、

わざと誤魔化し平気でウソをついたりするんだ」という説明は、キリスト教のような一神教で、人間に自然や動物(生き物)に対する支配(破壊)の正当性を与えてきた思想によく当てはまりそうです。

これに対し、インド文明では宗教的に殺生が忌み嫌われ、今日でも肉食主義者が多いと言われています。

また、同じ東洋でも中国では肉食は当然のことで、動くものは何でも食べ食欲にタブーはないようです。アユの伝統では、食糧としての熊に神性を感じ自然との共生を重んじている古代人の生活も紹介されました。「自然保護」「動物愛護」「動物の権利」という考え方は、人間が利己的欲望を肥大化させ、生きることの根本的意味を見失ってきことへの警鐘といえるのではないのでしょうか。

参加者の方からの感想

人間は何故動物に価値を付けたか、管理していいと許されているのか(誰に許されたか、何を根拠にそうしているのか)「この疑問に対し「私はこう思う」というのが、私という個の証明というか、確立なんではないかな・・・とも考えておりました。こんな昔からの疑問に明確な正解を見つけないことはできませんでしたが、それを考え続けること、そのことを他の人たちと話し合ったりすること、また他者の意見を「そういうものもあるのか」と受け取ることが大事なのではないかな・・・と思いました。あいまいな答えですがそれが大切なかと・・・。

本日は貴重な体験をできて、とても楽しかったです。私如きの話にも、皆さんが耳を傾けて下さり、質問を

して下さったり嬉しかったです。ありがとうございました。ごさいました。

人間・言葉という文字が大きなテーマで、問題が重いので多くの時間が欲しいです。(W)

今日のテーマ、「人間と動物のちがい」ということについては、最近、他のところでも議論する機会がありました。人権の問題を考える上で、深く問題をとらえるためには、どうしても必要な議論だという気がします。今日の話し合いの中では、犬や猫をペットショップで値段をつけて売り買ひすることがなぜ、許されるのか?昔から疑問だったというお話が、一番心に残りました。

個人的には、人権というものを、単に「理性」によって導けるものとするリベリズムの視点には、どうしても納得できないところが残ります。でも、それは、どう考えたらいいのか?やはり、遠回りのようでも、人間が、「生命」に対して感じる感情のありようを、ていねいに分析したり、議論したりするしかないような気がします。そのためには、話し合いの中でもでていたように、動物(や植物)に対して人間が感じる共感や愛情。逆に、同類であるはずの人間に対して感じてしまう攻撃性などについて、もっと考えなければいけないのかもしれない。ヒントの多い話し合いでした。(N)

